

田中小実昌

絵・野見山暁治

また横道にそれますが



また横道にそれますが

田中小実昌

絵・野見山暁治

また横道にそれますが 一九八一年七月十五日 第一刷発行 定価一、一〇〇円

0095-703140-8715

著者／田中小実昌 © *Komimasa TANAKA 1981*

挿画／野見山暁治・田中アサミ 装幀／池田拓

編集人／守屋健郎 発行人／大原規男

発行所／読売新聞社

〒一〇〇東京都千代田区大手町一―七―一

〒五三〇大阪市北区野崎町八―一〇 〒八〇二北九州市小倉北区明和町一―一―一

印刷所／株式会社三陽社 製本所／大口製本印刷株式会社

〈落丁・乱丁本はおとりかえします〉

また横道にそれますが \* 目次

- ぼくにお賽銭 7 レインコート 11  
桜とバスと 15 さくら・さくら 20  
さすがは芸大教授 25 花がいつぱい 29  
こまった流行 33 背広はつまり上下か<sup>かみしも</sup> 38  
最後の大根 43 ピンポン式完敗 47  
コテージ・チーズ 52 川と海はどうちがうか 56  
東西暴走 61 大阪でうまいものに 65  
魚の目とスクワッシ 69 柔道無級 74  
アセモと立喰ソバ 79 犬のわる口 83  
テレビの上の物 88 ある映画の題名「ヤンクス」 93  
そのスジのひと? 97 なんしにきたのか? 101  
午後、ベッドで本を 106 二週間一日分の日記 110  
めずらしくレストランに 114 やっとハワイに 118

オオ、ボウズ！ 123 雨が降ってる 128

露天風呂 133 純毛コットン 137

おもしろい本 141 海峡とキノコ 147

夜のレンガ 152 見えない人 157

なぜエントツの煙は白いか 161 三角ベース 166

ガマガエル 170 ふた通りの手紙 174

アニキが犬のスケッチを 179

特別寄稿  
いつもの喧嘩 野見山暁治・文 田中アサミ・画 179

焼酎、ジン、ウイスキー 188 娘のネタ 192

静かな一日 197 ノウゾーさんとガキューさん 201

いろんなひと 205 昨日きのう読んだもの 210

ノーマ・ジーンのパイ、サンディエゴの第一夜 214

散髪代三円五十銭 218  
オーシャン・ビーチ 223

ナオちゃん 227  
リタイア 231

トロッコとトラック 235  
テレビ、金庫、自転車 240

ノウゾーさん 244  
ゆりかもめ 249

「遠い雷鳴」 254

また横道にそれますが





## ぼくにお賽銭

春になったので、レインコートを着ている。その前は、膝の上までの機動隊のコートを着ていた。紺色で、かたちは無骨だが、裏はキルティングがしてあり、ぶかぶか、あつたかく、おまけにかるい。左腕の袖口に、定期券をいれるケースみたいなものが縫いつけてあり、ここに、自分の所属する機動隊名、姓名、そして、乱闘などの場合、負傷したときのための血液型を書いたカードをいれるようになっていいる……と言うと、たいていのひとが本気にする。それほど、機動隊風のコートなのだ。

あるとき、このコートを着てあるいと、ちゃらちゃら、金属的な音がした。なんの音だろう、とぼくは首をひねった。ズボンやコートポケットに手をつつこんだが、バラ銭もない。この機動隊のコートにはポケットが六つあるが、十円玉一コはいつていなかった。

ぼくは足をとめ、うしろもふりかえってみた。足もとに、糸がついた小銭でもひきずってないかと……。しかし、もちろん、そんなものもない。そして、こうして立ちどまると、その音はせず、あるきだすと、ちゃらちゃら鳴る。

ぼくは立ちどまつたり、あるいたりし、あちこちのポケットもふつてみた。そんなことをやってみるうちに気がついたのだが、どうも、ぼくの左腕が鳴ってるようなのだ。左腕の、袖口のあたりが……。だが、ぼくは腕時計ははめていない。腕時計はもってるが、手首にはめると、痛かったり、かゆかったりするので、机の上においたままにしてある。この腕時計が、また、しょっちゅう止っている。

ちゃらちゃら鳴るのは、機動隊のコートの左腕の袖口に縫いつけてある、れいの定期入れみたいなやつだった。底（下）のほうは縫込みにかくれていてわからなかったが、そこらに、五円玉と五十円玉がはいってたのだ。これは、上のほうにファスナーがついていて、つまりは、プラスチックの透明な小ポケットみたいになっている。しかし、ぼくは、ここに小銭なんか入れた記憶はなかった。

それから、なん日かたった夜か……はっきり、おぼえてはいないが……ぼくが、もうこのことは忘れてしまつてるとき、ある女のコが、この五円玉と五十円玉を見つけて、「これ、なーに？」とたずね、ぼくは、自分でも、わけがわからない、とこたえた。

すると、その女のコは、鈴がついた、ちいさなサイフをだし、五円玉をつまんで、このなかにいれた。

ぼくはめんくらい、どうして、そんなことをするのか、とたずね、女のコは、「お賽銭よ」とこたえた。すると、そばにいたほかの女のコも、「わたしも、お賽銭をあげるわ」と十円玉をいれた。はじめにあった五円玉と五十円玉も、どこかの女のコが、こんなふうにして、お賽銭をあげてく

れたのを、ぼくは酔っぱらっていて、まるつきりおぼえていないのだろう。

「お賽銭ねえ」ぼくはため息をついて、頭をふった。ぼくは、どこの派にも属さない教会の牧師の子だ。戦争中は、招魂社の前をとおるときなど、頭をさげさせられたりしたが、そのほかは、お寺や神社にお参りしたことはなく、お賽銭なんてものは、あげたことがない。だから、うーん、お賽銭か、とうなって、ため息がでてしまった。

しかし、お賽銭というのは、ホトケさまとか神さまとかにあげるもんで、生きてるニンゲンにあげるものではないはずだ。それを、どうして、ぼくが、女たちからお賽銭をもらうのよ。ぼくのほかに、お賽銭なんかもらってる男は見ることがない。

男は、だれも、お賽銭をくれなくて、女だけがお賽銭をくれるのもおもしろい。そんなところを、じぐじぐ小説に書けるかもしれない。もつとも、みんながよろこぶような小説にはなるまい。

ともかく、ちょいちょい、女たちが機動隊のコートの袖口にお賽銭をいれてくれた。いちばん最近、お賽銭をくれたのは、「フランシーヌの場合は」の歌で有名になった、歌手の新谷のり子さんだ。ノンちゃん（新谷のり子）とは前橋の競輪であり、ぼくに五十円玉のお賽銭をくれ、そのあと、ノンちゃんは、六レースつづけてとった。

この機動隊のコートは、パチンとはめこむホック式のボタンになっている。渋谷のデパートで、女房がこのコートを買ってきたとき、さっそく、コートを着て、ボタンをはめ、景気よく、ぱっと前をひらいたら、ボタンがみんなとれてしまった。

それで、ぼくはこのコートをデパートにもっていき、コート売場のひとに、ボタンの修理をたの

んだが、こういう場合、修理がおわって、もどってきて、もどつてきても、じつは、修理ができてないほうがふつうで、また、すぐボタンがとれてしまふ、それに、修理が不可能なもの、これまたよくあることで、そういう場合には、そのとおり、こたえてほしい、べつに、おこつたりはしない、だって、そのほうがふつうだから……とくりかえし、デパートでは、たぶん、コートの製造元（メーカー）に修理をたのむとおもつたので、おなじ内容の手紙もわたした。

しかし、こんなことをしたのは、ぼくははじめてだ。だいたい、ぼくはいいかげんなほうで、とくに、着るものとか、カタチのあるものは、どうだっていい。ただし、屁理屈にはうるさい。このときも、屁理屈をおしとおしてみたのか。いや、ただの気まぐれだろう。

もつとも、そのおかげで、ボタンはとれなくなった。いや、胸ポケットのボタンが一つとれてるが、それくらいは、しかたがあるまい。

ぼくは、この機動隊のコートが気に入ってる。くりかえすが、ぶかぶかゆつたり、かるくて、あったかい。それに、値段もたいへんに安かった。女房は、デパートのバーゲン・セールで買ったらしい。安かろう、悪かろう、という言葉があるが、ぼくは、安いことはいいことだ、とおもっている。

ただし、実際には、とくに食べるものなど、安かろう、悪かろう、というのがふつうで、そのなかから、安くて、うまいものをさがすのは、むづかしい。はじめから、いくらか金をだして、高級そんなものを買ったほうが、経済的だろう。

しかし、経済性にはたのしみがない。金と時間と労力をソソしてでも、安くて、うまいものをさ

がしてあるくほうが、たのしみがある。いや、つまりは、ヒマなんだな。

## レインコート

春になったので、レインコートを着ている、と書いたが、寒いあいだは、紺色の機動隊のコートを着ており、とよけいなことを言いそえたのがいけなくて、とうとう、はなしがわき道にそれっばなし、レインコートは消えてしまった。

しかし、ぼくのはなしは、いつもそんなふうで、わき道にそれてばかり、それでも、ときどき本筋にもどるかという、もどらない。わき道から、またわき道へと、流れ流れて、さきはどうなるか、自分でもわからない。

ただし、これは家出のヒケツでもある。家出をしては、女房につれかえされる、ドジな亭主がいるが、これは、家出先が一カ所だけなのがいけない。ぼくみたいに、家出先からまた家出し、そこからまた家出……といったぐあいになると、もうつかまらない。

ともかく、ぼくのはなしは、わき道つづきで、どこかにいっちまうようなことばかりだろうが、どうかおこらないでください。わざと、わき道にそれるんじゃなくて、ついつい、わき道のほうにいっちまうんです。

いや、今、気がついたのだが……今ごろ、気がついちゃおそいか……もともと、ぼくのはなしや

小説でも、本筋というのがないんだなあ。本筋がなきゃ、本筋にもどれないのは、あたりまえか。さて、レインコートだが、春になったので、それまでの機動隊のコートのかわりに、ぼくはレインコートを着ているけど、それも、せいぜい二週間か、三週間ぐらいのことだろう。一カ月も、レインコートは着ていまい。

レインコートのことで、今、おもいだしたが……今、おもいだすことがおおくて、いけない。そんなふうなので、すぐ、はなしがわき道にそれる……女房は、ぼくのレインコートを、三着はつくった。だんだん、レインコートのつくり方がうまくなり、防水もじゃうずになった、と女房は自慢した。女房は、ぼくの背広なんかもつくった。レインコートよりも、背広をつくるほうがむづかしいかもしれないが、亭主のレインコートをつくる女房というのも、めずらしいのではないか。お金がなくて、背広も、レインコートも買えないから、しかたなしに、わたしがつくったんじゃないの、と女房は言うが……。

ぼくは、今でも、女房がつくった上着コートを着ている。いや、うちにあるコートは、みんな、女房がつくったものだ。レインコートを着ている期間が、せいぜい、春さきの二、三週間なのは、そのあとは、コートを着るからだ。女房がつくったコートは、なによりも、からだに楽なのがいい。

今、ぼくが着てるレインコートはパーバライズで、デパートのバーゲン・セールで買った機動隊のコートの値段の十倍以上はするのかもしれない。濱垣容二さんが、ぼくにくれたのだ。ことわっておくが、新品のパーバライズのレインコートで、濱垣さんが、どうして、こんな高価なものを、ぼくにくれたのかはわからない。

濱垣容二さんは早稲田大学の英文科を出て、松竹歌劇団の踊り子になった。松竹歌劇団で、二期だけだが、男のコの踊り子をとったことがあったのだ。その後、濱垣さんは新宿フランス座の舞台にでたりしていたが、今は、マルスという会社をやっている。

ふしぎなのは、濱垣さんからバーバライズのレインコートをもらったたら、ぼくが前からもついていたレインコートが消えてしまった。よそから、もう一匹、猫をもらってきたら、前からうちにした猫がいなくなった、ということがあるらしい。しかし、レインコートも、猫みたいに、つまりは、新しいレインコートに嫉妬して、家出するということがあるのだろうか？

新宿ゴールデン街で飲んでいて、どこかに、レインコートを脱ぎわすれたらうれしいのだが、とうとうでてこない。

新宿ゴールデン街は、花園神社の裏手の、元青線のせまい路地で、ぼくが飲んであるく範囲も、せいぜい半径、二、三十メートルぐらいだろう。飲みに行く店もきまつてる。それなのに、レインコートは杳として、行方がしれず、消えてしまった。

やはり新宿ゴールデン街の「しの」で、このレインコートと、ひとのレインコートをまちがえて、もつていったことがある。

しかし、よくまちがえたねえ、とみんなに感心された。ぼくがまちがえて、着ていったレインコートは、すぐく背が高い、若いひとのものだったのだ。

1925年（大正十四年）生れのぼくは、身長164センチで、ぼくの歳ごろではふつうの身長だが、若いひとたちのあいだにはいると、チビだ。ぼくがレインコートをまちがえた若いひとは、



とくに背が高く、だから、ぼくが、このひとのレインコートを着たら、九州弁で言うところ、地面にぞろびくようだったはずなのに、ぼくが、レインコートをまちがえたのに気がついたのは、翌日だった。

ぼくがまちがえて、自分のレインコートをもっていかれてしまった若いひとは、たいへんに律気なひとで、つんつるてんでも、ハーフ・コートのつもりで、ぼくのレインコートを着て、うちにかえればいいのに、おなじ新宿ゴールデン街のなかの、ぼくのいきつけの飲屋に、ぼくのレインコートをどけた。この日は、夕方から風がでて、夜になると冷く、その若いひとは、レインコートなしで、ふるえながら、うちにかえったそりだ。

しかし、ぼくのほうもヒドイ目があった。この夜は、ぼくは、ちょいとわけがあつて、このいきつけの飲屋にはよらなかつたのだ。飲屋のカミさんは、カリキリにおこり、すぐ近くの、しかも新宿ゴールデン街のなかにきていながら、どうして、うちにこないのよ、とぼくはこつてりしぼられた。

弁解するが、ぼくとこの飲屋のカミさんとは清い仲だ。清い仲の女が、なんで、こんなにおこるのか、ぼくにはさっぱりわからない。このはなしを、男たちのあいだですると、ほんとに、清い仲の女なのに、おこるんだよねえ、いや、清い仲のほうが、よけいおこるみたいだよ、と男たちはなげている。

こういうはなしも、ぐちぐち書けば、小説になるかな。いや、そういう小説は、おおいのかな。ほかの作家が書いてるのなら、ぼくみたいいなへたくそが書くことはなかるう。だいいち、女心なん